

新刊紹介

稲葉 襄 著

『フランス中小工業問題論』

本書は、稲葉 襄教授が『国民経済雑誌』（神戸大学経済経営学会）を通じて発表されていたフランスにおける中小工業問題に関する研究を一冊の書物にまとめあげて上梓されたものである。

最近わが国においてもようやく中小企業の国際比較研究ないしは諸外国における中小企業問題の研究が盛んになりだした（拙稿書評「加藤誠一著『中小企業の国際比較』関西大学経済学会『経済論集』第17巻第3号 昭和42年9月、101～111ページ参照）とはいうものの、焦点を一國の中小工業問題に関する学説にあわせてこれを奥深く探究するという研究はいまだその濫觴の期にあるといわねばなるまい。ましてフランスにおける中小工業に関する研究は、著者ものべていられるように、たしかに「いままでに、フランスにおいても比較的少なく、またわが国においては独立のまとまった著書としては皆無であるように思われる」。(序) したがって、これまで稲葉教授の論文にたいしても幾冊かにわたる『国民経済雑誌』を通じてしか接することができなかったのが、今『フランス中小工業問題論』という珠玉の書物として手にする機会があたえられたわけであり、このよろこびは筆者一人のものではないと信ずる。

さて、本書の構成についてみると、それは以下のとおりである。

第1章 フランス中小工業問題の発展

- I フランス中小工業問題の発生
- II その後のフランス中小工業の状態と問題の進展

第2章 フランスの中小工業問題に関する学説

- I 第一類型の諸説
 - A ジャンヌニエーの説
 - B ビュルジュエの説
- II 第二類型の諸説
 - C ラロワールの説
 - D ビュッケの説

E ヴェルポーの説

Ⅲ 第三類型の諸説

F モーリス・ブーヴィエ・アジャムの説

G ガストン・オーゲの説

第3章 フランス中小工業問題論の特質

ところで、学説研究をなさんとする際、学説と実際社会との関連性については、「実際は学説を支配し、学説はまた實際を動かしてゆく。実際と学説とが相互に作用することは、歴史の教えるところである。しかしながら、両者のうちいずれがより強く作用し支配するかについては学説のわかれるところである。これは畢竟、存在が意識を決定するか、あるいは意識が存在を決定するかの問題にまでさかのぼることになる」(花戸龍蔵著『財政原理解説』(千倉書房)昭和31年、159ページ)のであるが、もとより存在と意識は密接な関係にあり、相互作用である。このことは中小工業問題研究についても当然いえる。それ故にフランスにおける中小工業問題、したがってその問題にたいする意識としての学説は、フランス資本主義の歴史的展開との関連において把握し、理解することが必要である。この意味において第1章ではフランスにおける中小工業問題がどのような歴史的背景のもとに発生し、そしてそれがどのように進展したかが論じられている。

すなわち、フランスにおける資本主義の特徴は、まず産業革命についてもイギリスに遅れをとり、しかも小農経済が支配的である農業構造と密接に結びついた小規模工業が存在するにいたったということである。そして、ここにいわゆる小規模工業とはアルティザナ(artisanat)＝手工業によって代表され、それは社会階層的には中産階級を形成するものとして理解される。フランスにおける中産階級の地位が他の国に比して非常に重要であるということは周知のとおりであるが、著者は経済構成においてもそれが他の産業国よりも重要であるということを経数多くの資料によって立証されている。(3～4ページ)もっとも著者は、「アルティザナすなわち手工業という訳はあまり適当でなく、アルティザナ論がフランスの中小工業問題に全面的に一致するとはいえない」と批判的な態度を示されているが、「諸説にのべるアルティザナ論はその問題点を生産手工業において論じていると考えられる場合が多い」ということから、「手工業をフランス中小工業問題論究明の対象の一部とした」ことをあらかじめことわっていられる。(10～11ページ)したがって、中小工業問題も、第一次大戦後進展をみせだしてきた独占にたいする手工業者の保護という形で1923年頃にまず発生し、その本格化は「マンデス・フランスが非能率の企業を排除し、資本集中をはかった1954年頃からはなかるうか。」(8ページ)と推論されている。

その後における中小工業の状態と問題の進展については、第二次大戦とフランス経済の関係、すなわち、破壊、再建、復興、安定、EECの誕生などとの関係においてみられている。それは畢竟、国家と経済との関係としては国家における近代化政策のなかで、また産業構造の内部においては独占ないし集中化のなかで、中小工業問題がどのように進展してきたかということである。

ではこのような歴史的過程を背景として、フランスにおける中小工業問題について、どのような学説が唱えられたかということについて、著者は三つの類型にわかって究明されている。（第2章）

すなわちその第一類型の学説は、「資本主義発展に伴い中小工業・手工業は消滅すべきものであり、消滅をさまたげる要因が過度な国家政策であるとし、これはむしろフランス経済の発展をさまたげるものであるとして、近代化政策登場の必然性への序論的意味をもつもの」（81ページ）であり、その代表的学説として、ジャンヌニ（Jean Marce Jeanneney）やビュルジュス（Eugene W・Burgess）などの説があげられている。両者の説は、資本主義社会における資本運動からするならば、中小工業は消滅すべきものであるという考え方は同じであるが、その消滅をさまたげている主要因について、ジャンヌニが国家の不合理的な温存政策を重視する点において外部的残存条件説、ビュルジュスが経営者の企業近代化への努力の怠慢さを指摘する点において内部的残存条件説、とも分類されている。

これにたいして第二類型の学説は、「独占の進展のなかにおいて、中小工業・手工業の存立分野のあることを認め、むしろ近代化政策を契機に、後退している分野への対策の必要を説くことによって、近代化政策を背景としてこれと結びつき、積極的に近代化政策の理論的支柱を形成するような説を主張」（81ページ）しているとされ、ラロワール（Marcel Laloire）、ビュッケ（M・Buquet）、ヴェルポー（M・Verpeaux）などの説があげられている。著者によれば、このグループの学者は、いずれも、小規模工業——主として手工業であるが——のカテゴリーの規定からまずはじめ、これらの存続可能な論拠を積極的に展開しているが、それはまたとりもなおさず小工業と大工業の優劣を明瞭化することであり、それによって中小工業の存立分野を究明するという点において、それはまさしく、従来から一般的にいわれている不完全競争論の一類型であるといわれる。（52ページ）

最後に第三類型の学説とは、「中小工業・手工業は結局資本主義の進展によって消滅すべき運命をもつとし、近代化政策が中小工業、手工業の近代化を称えながらも、結局中小工業・手工業の圧迫政策となっており、したがって独占資本へ奉仕する政策であるとす

るもの」(81ページ)といわれている。このグループに属する学者としては、モーリス・ブーヴィエ・アジャム (Maurice Bouvier-Ajam) とガストン・オーゲ (G. Augé) があげられている。他のグループにはみられなかったこのグループの特徴は、中小工業を独占資本に對置して考察しようとしている(アジャム)ところや、手工業問題を金融資本による収奪ないしは破滅化としてとりあげている(オーゲ)点に認められるであろう。

以上三つの類型における学説は、「フランス經濟の發展に基づくフランス中小工業問題の歴史的進展に照応する」(81ページ)のものであり、このような三類型の学説を通じてみられるフランス中小工業問題論の特質(第3章)とは、まず第一に、それが手工業問題論として現われている点であり、第二には、中小工業問題についての議論が他国に比してとほしく、同時に中小工業問題についての比較的まとまった意見の発表の時期も相對的に新しいことであると主張されている。そして第三の特質は、他の欧米諸国の中小工業問題論に比し、フランスにおいては、對独占の關係において、中小工業問題をとらえる学説が多いということであると主張されている。

著者によれば、第一の特質、すなわち、それが手工業問題として現われているということは、ドイツにおいて、中小工業問題がハンドヴェルクの問題として現われているのとよく類似しており、第三の特質、すなわち、對独占の關係において、中小工業問題をとりあげるといふ点において、日本の場合に似ている。

以上きわめておおまかに本書の紹介を試みたが、本書にみられるような、諸学説にたいする簡潔な分析は、根本的には全く著者の斯学における造詣の深さを示していることにはほかならない。しかしながら、それにもまして、他の国の中小企業ないし中小工業を研究する場合と比べて、文献と資料が少ないとみなされているところのフランスの場合をとりあげられ、それをみごとにまとめあげられたということにたいして、読者は新たなる畏敬の念をはらわずにはいられないであろう。

最後に、本書がもつ学問的意義をここに強調して筆をおくことにする。

すなわち、その第一のものは、本書によって、フランスにおける中小工業問題の發生とその展開(實際)、したがって、これに對して中小工業問題論(学説)がどのように展開せられているかということ、われわれが明快に学びとることができるということである。そして、その第二のものは、われわれは本書を熟読することによって、本書にとりあげられているところの一つ一つの学説について、今度は自分自身の手によってそれらをひもときたいという、より一層の学問的意欲が燃やされてくるということである。(森山書店、昭和42年11月刊、A5、i+88ページ、500円)

—田中 充—